KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

視覚動詞 look/see、「みる」/「みえる」の比較：動作主性および視覚認知プロセスに基づく認知言語学的考察

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 視覚動詞, 認知言語学, 動作主, see, 「みえる」 キーワード (En): 作成者: 久保田, 美佳 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学大学院博士課程後期
URL	https://doi.org/10.18956/00006012

関西外国語大学 研究論集 第103号（2016年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.103（March 2016）

視覚動詞 look／see、「みる」／「みえる」の比較
：動作主性および視覚認知プロセスに基づく認知言語学的考察

久保田　美　佳

要　旨

視覚動詞 look／see、「みる」／「みえる」には、物理的に視覚で知覚する意味と、心理的なイメージを伴う心的に知覚する意味の両方があるが、本稿では、主に物理的な視覚による知覚について認知言語学的に比較・分析する。一般的には look at が「みる」、see が「みえる」であると考えられているが、これら日英の視覚動詞のそれぞれが独自の意味範疇を有し、このような単純な対訳では不十分であると思われる。このことを考察するために、これまで意味特定の基準として広く用いられて来た「動作主の有無」の妥当性を問うとともに、生態学および認知科学的な視覚情報の処理プロセスに関する知見を基に look／see、「みる」／「みえる」によって喚起される概念や機能の顕在化または希薄化の傾向を示し、言葉自体の意味が文脈によって変化する可能性を検討する。

キーワード：視覚動詞、認知言語学、動作主、see、「みえる」

１．はじめに

一般的な英語教育では look（at）が「みる」see が「みえる」であると説明されることが多い。しかし、この対訳は、表現を表面的に捉えているだけであり、限られた文脈での限られた用法の一側面に言及しているに過ぎない。これらの日英視覚動詞それぞれが文脈によって様々な意味を表すのは周知のことであるが、本稿では、＜視覚で知覚する＞とは何を意味するのかを視覚を一連の認知プロセスという観点から検討し、これまでの動作主の有無による議論の限界を指摘するとともに、英語の look／see および日本語の「みる」／「みえる」によって喚起される概念と機能を認知言語学的に比較検討する。

２．理論的枠組みおよび先行研究

2.1 認知言語学的言語観

認知言語学では、言語は人の数多くある認知活動の１つであるとし、かつての生成文法

（Chomsky 1957, 1965）で提唱された独立した言語能力の存在には否定的な立場を取り、以下の考え方（Langacker 1987, 1999, 2013; 山梨2000, 2009, 2012）を基本としている。(1) 言語は人間の認知活動の一部であり言語に限定された能力は存在せず、よって人の言語活動は一般的な心的・動的能力と深く関わりがある。(2) 言語は人が自らの心的および身体的体験に基づき内的または外的事象を概念化し抽象化したものである。(3) この概念化・抽象化はアルゴリズムやプラス・マイナスのような数式的なものではなく、漠然とした概念のネットワークの集合体からの抽出によって形成されるものであり、言語で表される意味は固定されておらず、通時的にまた場面や状況によって変化する。また、(4) 言語の１つのまとまり（例：文章）はその構成要素（例：単語）の単なる総和としての意味を持つのではなく、まとまり全体として、文脈、場面、状況によってゲシュタルト的に独自の意味を持つものである。

言葉が概念の集合体であることについて、Givón（2001）は次のように述べている。“The human conceptual lexicon is a repository of relatively time-stable, relatively socially-shared, relatively well-coded concepts which, taken together, constitute a cognitive map of our experiential universe…（Givón 2001: 7）” つまり、言葉の意味は、通時的にある程度固定され、社会的にある程度共有され、ある程度コード化された、相対的なものであり決して絶対的に存在するものではないのである。

図１は、Langacker（2013）の言葉の意味を表す略図であり、１つの中核的共有域を有する多数の概念を表す概念領域（domains）で言葉の意味が構成されていることを示している。これらの領域で示される概念は完全に固定されているわけでもないが、完全に不安定でもないのである（Langacker 2013: 39）。[1]

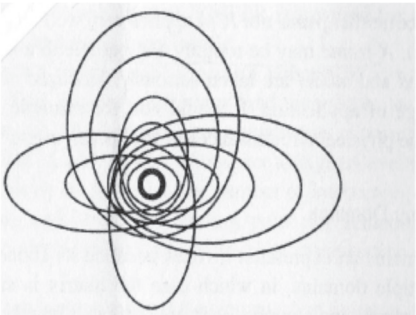


図１
（Langacker 2013: 48）

例えば、本稿の主題である視覚動詞 look／see、「みる」／「みえる」の場合、いずれの語の意味もその中核的共有領域（左図の中央の**太線丸部分**）には、＜視覚で知覚する＞という概念が存在し、それを中心に様々なその他の概念、例えば＜認識＞、＜記憶＞、＜注目＞、＜理解＞、＜観察＞、＜判断＞、＜予測＞、＜評価＞などが重なり合っている。そして、言葉が発せられた文脈や外界または発話者の心的状態によって、いくつかの概念が顕在化され、また別のいくつかは希薄化されて、言葉の意味がそのときどきに伝達されると考える。この概念領域の顕在化・希薄化もまた、上記 Givón（2001）にあるように、決して有無に二分化されるものではなく相対的かつ程度によるもので、複数の様々な領域がそれぞれ異なる度合いで顕在化または希薄化されることによって１つの言葉の多義性が生まれるのである。しかし、従来の

辞書では１つ単語に複数の意味がある場合、各意味がそれぞれ独立して存在するかのように、意味が別々に列挙されるに留まり、その１つ１つを母語話者らが使い分けているかのような印象を与える場合がほとんどである。[2]

2.2 先行研究

2.2.1 物理的な視覚に関する先行研究

これまでも、視覚動詞についての研究がなされているが、その多くは物理的な視覚、つまり、実在するモノを目を通して知覚するという意味の see／look、「みる」／「みえる」の検討である。

例えば、服部（1968）では日英語の see／look at、「みえる」／「みる」に、watch と「ながめる」を加え、それぞれを５つの項目（intention/active, focus, curiosity, stationary, ability）で「＋」、「－」、または「0」の３段階の評価を基準にした比較が行われている。

物理的に視覚で何かを知覚するという意味の視覚動詞に関する論文で代表的なものの１つに、Gruber（1967）による see と look の比較があり、後に続く方向性を示す前置詞の有無およびその種類による分析が行われている。まず、see に後続する to に着目し、前置詞 to には、「～へ／～に」（例：大阪へ／に行った〔しかし他はどこへも行かなかった〕。＝〔目的地〕）の意味と、より限定的で線的な移動の到達点を表す「～まで」（例：大阪まで行った〔しかしそれより向こうは行かなかった〕。＝〔終点〕）の両方が含意されているが、fly（飛ぶ）のような動詞の後に続く to は〔目的地〕と〔終点〕のいずれでもあり得るのに対し、see の後の to は〔目的地〕しか意味しないとしている。従って、下記の例文（1）の have flown to の to は、（2）の have seen to の to と異なり、故に、（2b）は非文であり、see で〔目的地〕の意味を表す場合は（3）になるとしている。

（1）The Russians have <u>flown to</u> the moon.（ロシアは月まで／へ飛んだ。）

（1a）The Russians have <u>flown to</u> the moon, but no further.
（ロシアは月までは飛んだがそれより先までは飛んでいない。）

（1b）The Russians have <u>flown to</u> the moon, but nowhere else.
（ロシアは月へは飛んだが他のどこへも飛んでいない。）

（2）Astronomers have <u>seen to</u> Andromeda.（天文学者らはアンドロメダまでは見えた。）

（2a）Astronomers have <u>seen to</u> Andromeda, but no further.
（天文学者らはアンドロメダまでは見えたが、その先は見ていない。）

（2b）*Astronomers have <u>seen to</u> Andromeda, but nowhere else.
（天文学者らはアンドロメダまで（終点）は見えたが、他はどこも見ていない。）

（3）Astronomers have <u>seen</u> Andromeda, but nothing else.

（天文学者らはアンドロメダは見えたが、他の何も見ていない。）（Gruber 1967: 938）[3]

また、look については後続する前置詞が to ではなく、head, aim などと同様に、より方向性が強いとされる toward（「～に向かって、～の方（向）を／に」）であることを以下の例文で示し、このことから“The semantic distinction between *see* and *look* is largely due to the distinction in the underlying prepositions demanded by them（Gruber 1967: 942）”、すなわち、see と look の意味の違いの大部分は必要とされる後続の前置詞の違いによるものであると結論付けている。

（4）*John looked to the tree.　（John looked at the tree.）
（5a）*John headed the well.　（John headed toward the well.）
（5b）*John looked the tree.　（John looked at the tree.）
（6a）The bird flew toward the tree.　（鳥は木に向かって飛んだ。）
（6b）The bird looked toward the tree.　（鳥は木の方を見た。）　Gruber 1967: 942, 943）[4]

上記の考察のほかにも Gruber（1967）は、look と see の違いとして前者は主語が動作主（agentive）であるのに対し、後者は非動作主（non-agentive）であるとも述べている。しかし、この点についての詳しい説明はされておらず、“An Agentive verb is one whose subject refers to an animate object which is thought of as the willful source of agent of the activity described in the sentence（Gruber 1967: 943）.”、すなわち、動作主的動詞（agentive verb）はその動詞が含まれる文の主語が、意志を持つ生命体であると記すに留まっている。

2.2.2 心的視覚などを含む視覚動詞の多義性に関する先行研究

視覚動詞の多義性については、物理的（physical）な視覚から心的（mental）な視覚へ、更には、＜監視・管理＞、そして＜理解＞の意味へと展開して行った過程を分析した代表的な通時的研究の１つに、Sweetser（1990）があり、vision という大きな枠で語源学的に視覚動詞がどのように発展して行ったかが検討されている。その中で、視覚に関わる動詞が客観的および知的な活動にも関係があること、また、管理や監視は視覚を通して行われるため実際の＜管理・監視＞に関わる意味を持つ言葉が視覚動詞から生まれたこと、更には、＜理解する＞という心的な管理・監視および操作を必要とする意味にまで及ぶようになったことが示されている。“The objective and intellectual side of our mental life seems to be regularly linked with the sense of vision, …（Sweetser 1990: 37）”と述べられているように、人間の心的側面が視覚と密接に関わっていることがこの通時的研究によって明らかにされている。

油井（1996）は「ミル」の持つ＜経験する＞（例：馬鹿を見る）や＜評価＞（例：人を見る目がない）などの抽象的な用法を、体験や知識に結び付けて列挙はしているが、「ミル」の多義性についての十分な説明には至っていない。

これに対し、田中（1996）の「見る」に特化した研究では、＜視覚＞＋＜認知＞という基本義から＜理解＋判断＞、＜処置＞へと段階的に意味拡張させた意味ネットワークを用いた「見る」の多義性の分析が行われている。[5] また、深田（2001）は言語表現における出来事や対象に対する視点の主体化と主観化についての研究の中で、look の「～を見る（目を向ける）」の意味から“The car looked so nice and white.”などに用いられる「～に（と）みえる」または「～に（と）思われる」への意味変化の分析を行い、「…私たちは、ある人の『X に目を向けた』という発話を聞いただけで、その人が何らかの対象あるいは出来事の視覚的印象を得、その対象あるいは出来事を X と判断し、そこからさらに何等かの推論をし、その対象あるいは出来事に何らかの対処をしたであろうと語用論的に推論することができる（深田2001: 76）。」としている。また、山梨（2012）も視覚動詞が文字通りの視覚に関わる意味から、思考・推論・判断に関わる意味へ拡張されていることを指摘し、以下の例文を挙げている。

(7) a. この問題にどう対処したらいいかが見えてきた。
　　b. 僕にはこの問題の解決法がどうしても見えてこない。
　　c. 今年は景気がよくないと見ている。
(8) 武士道というは、死ぬと見付けたり。（山本常朝『葉陰』：p.23）（山梨2012: 108）

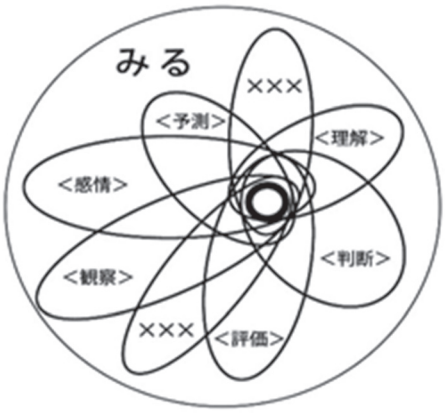
2.3 先行研究のまとめ

上記の先行研究で、まず物理的な視覚については、Gruber（1967）の後続する前置詞の違いによる look と see の区別が興味深い。しかし、同論文の後半では、動作主的主語の可不可のみによってこれらの視覚動詞の違いが論じられており、look は進行形になるが see はならないという一般的な状態動詞の説明の枠を脱していない。つまり、look ならば意志が働き、see ならば意志が働かず、また、主語に意志があれば look であり、なければ see であるという循環論法的とさえ取れる議論となっている。状態動詞と呼ばれる種類の動詞の特徴として、この主語の意志の有無という二者択一的な判別方法が広く用いられているようであるが、認知言語学的には人の思考はこのように絶対的なものではなく、故に、単語、語句、文などが持つ意味は、2.1でも示したような曖昧な概念の集合体にほかならないと考えられている。

視覚動詞の多義性については、田中（1996）や深田（2001）のように言葉がその基本的な意味（視覚動詞の場合は＜（物理的に）視覚で知覚する＞）から段階的に拡張または変化し、より心理的な意味や内面的活動、それによる行為（視覚動詞の場合は＜管理＞＜評価＞＜推察＞

など）を表すようになるという考えは、人の認知活動の中の関連付けの方法（メタファー（隠喩）やメトニミー（換喩））を考察するのには適しているかもしれないが、「みる」という言葉を発する、または聞くことによって人の意識に喚起される意味全体を捉えるには不十分に思われる。例えば、「世間を甘くみていると大変なことになるぞ。」とか「人をみて話しなさい。」というような文を発するとき（または聞いたとき）、人はこれらの文中の「みる」から＜視覚で知覚する＞という概念はもちろんのこと、＜判断＞や＜評価＞と並んで、例えば、＜検討＞、＜理解＞、＜洞察＞、＜確認＞などの概念も呼び起こされるかもしれず、更には、「相手の顔色をみた。」や「母の喜んでいる姿を静かにみていた。」など場面や状況によっては＜恐怖＞、＜悲しみ＞、＜愛情＞、＜感謝＞、＜後悔＞など情緒にさえも及ぶ認知作用を無意識に体験するのではなかろうか。

Sweetser（1990）のように vision という基本概念から様々な単語がスピンオフ的に生じたとする議論は、通時的な変化の根拠としては受け入れられるが、現存する言葉が持つ多義性を意味拡張または変化として位置づけ、物理的視覚から心的視覚へと段階的に分離して行くかのような説明は、言葉の意味の有機性や概念の集合という認知言語学の基本を捉え切れていないように思われる。意味拡張によって「みる」に心的な＜判断＞や＜評価＞の意味が付与されるのではなく、「みる」という動詞自体にすでに物理的および心的な様々な意味（概念）が含まれていて、場合や状況に応じてそのいずれかが様々な度合いで顕在化または希薄化するという考え方のほうが人の思考や認知活動に即していると思われる。このことを筆者は久保田（2015）で論じ、本稿2.2で示した Langacker（2013）の図１に倣い「みる」の意味を図2のように示し、中心で共有されている太線丸の部分が「みる」の中核的基本義である＜視覚で知覚する＞であるとした。



（注）×××は、他の可能な意味領域を表す
図２「みる」の意味
久保田（2015: 23）

３．英語 see／look と日本語「みえる」／「みる」

以下では、近年の脳科学的な知見も考慮に入れ see／look、「みえる」／「みる」の意味分析を認知言語学的観点から行い、これまでの look =「みる」、see =「みえる」とすることの限界と問題点を検討する。

3.1 前提

2.2で示したように、see／look、「みえる」／「みる」などの視覚動詞の意味は、物理的な視覚と心的イメージを根拠とする心の視覚に大別され検討されるのが一般的である。本稿では、いずれの視覚動詞にも物理的な意味と心的な意味が混在していて、実質的に２つ分けられるものではないと考える。これは「知覚」（perception）と「思考」（thinking）は同等であり、「視覚」に限らず「知覚する」という行為は決して受け身ではなく、積極的に探究し、選択、真髄を把握、簡易化、抽象化、分析、合成、完成、修正、比較、問題解決、統合、分離し、そして状況や文脈に合わせるといった多くの積極的な活動を伴う行為で、「みる」は目を閉じて考える場合と基本的には変わらないとする Arnheim（1969:13）の主張にも即したものであり、また、身体的経験を基に事象を概念化し言語化するという認知言語学の基本的考え方の１つとも合致する。

このことを認知言語学的に換言すると、特定の文脈や状況の中で使用された視覚動詞の意味が物理的か心的かという区別自体が適切ではなく、集合として存在する様々な概念のうちの物理的な概念や心的な概念のうちのどれがどの程度、顕在化または希薄化されるかの度合いや傾向として言葉の意味を捉える必要があると考える。実際、Gruber（1967）と服部（1968）でも、look や see の物理的な視覚を検討してはいるものの、完全に心理面を除外しておらず、意志や意図および興味についての言及がなされていることからも、これらの動詞から心理的な側面を除外することは不可能であると推察される。

また、近年、生態学や脳科学、認知科学などの分野でも、視覚と脳内の様々な反応との関係も明らかになってきている（藤田2007、横澤1992）。例えば、千億あると考えられている脳内のニューロンが１ミリ秒（1000分の１秒）程度の電気パルス（活動電位）を発生し脳内の視覚経路を通って脳の奥へと情報が伝えられて行くのだが、その経路は１つではなく平行して複数存在するということが分かっている（藤田 2007: 94-107）。[6] つまり、ある視覚的刺激を受けるとその情報は脳内を１本の線状に進むのではなく、複雑にネットワーク化された複数の視覚経路で処理されるのである。だとすれば、言葉の意味もまた複数の概念の同時喚起によって生まれるのではないだろうか。

3.2 動作主の存在および主語の意志の有無による視覚動詞の区別の限界

3.2.1 英語 look と see の動作主性

2.2.2で触れたように、動作主的動詞（agentive verb）とは、その動詞が表す行為を引き起こすことのできる、意志（will / volition）を持った生命体が主語となる動詞を指すとされ、そのため、例えば、carefully など主語による意図的な態度や取り組み方を表す副詞では修飾できず、その根拠として、Gruber（1967）は次の例文を挙げている。

(9) John looked through the glass carefully.

(10) *John saw through the glass carefully.　　(Gruber 1967: 943)

しかし、この議論は単なる表面的なテストにしか過ぎず、なぜそうなるのかの説明にはなっていない。確かに（9）と（10）の looked と saw をそれぞれ「みた」と「みえた」と訳せば、以下のようになり英語の副詞用法の制限と合致する。

(9') ジョンは、ガラス越しに注意深く（carefully）見た。

(10') * ジョンに／は、ガラス越しに注意深く見えた。

これらの文では see や「みえる」が人の意志ではコントロールできないと見受けられ、故に、意志の存在の有無による議論が look と see の区別に広く用いられている。しかし、次のような場合はどうだろうか。

(11) …I looked down to see the man who had been trying to find cover.

(12) "Me, too," I said, leaning over to see the images.

(13) Fleur always wanted to see the latest fashions.

(14) He didn't want to see the rest of the apartment.　((11)～(14) は COCA[7]　から)

英文（11）～（14）の英語の例文で表されている内容は、see という動詞に対して主語である人間の意志が作用しなければ成立しない。(11) と（12）では主語は意図的に see という行為を行うために下を見たり、身を乗り出したりしたのであり、(13) と（14）では see という行為を行いたいという積極的な欲望（want ）が主語にあるのだとすれば、その前提としてその行為を行う意志と力を主語が有していると解釈するのが普通であろう。ならば、look と see の意味の違いは主語の意志や意図の有無によるという動作主説は表面的な現象のみの議論ではないだろうか。英語の look も see も大意は＜視覚で知覚する＞のであり、基本的には主体の意志なくしては実行し得ない行為なのである。

実際、認知言語学では動作主についても、その定義を意志の有無ではなく程度の違いであるとし、「動作主性」という考え方を用いている。例えば、同じ frighten（怖がらせる）という言葉であっても、主語が目的語となる第三者を意図的に怖がらせた場合と過失によって怖がらせた場合では、主語の動作主性の度合いが異なるのである（Langacker 1999)。[8]

これらのことから、＜主体による意志＞という概念は英語の look と see のいずれにも存在し、文脈によって look ではそれが顕在化され、see では希薄化される傾向はあるが、主体の意志や

意図の有無でこの２つの動詞の違いを十分に説明することはできない。

3.2.2 日本語「みる」と「みえる」の動作主性

では、日本語の視覚動詞の場合の動作主性はどうだろうか。英語の look と see とは異なり、「みる」と「みえる」は同じ一つの語幹を持つ動詞の変形である。「みる」と＜～ができる＞または＜～が可能である＞の意味を表す「える」という語尾変化（活用）によって「みえる」という言葉が構成されていることは母語話者の直感であろう。このことから、see に意味が近いとされ母語話者が無意識に独立した語句として用いている「みえる１」と、「みる」＋「える」の可能性や能力を意識した「みる」の活用形「みえる２」は、本来、区別して分析する必要があると考えるが、以下ではこの違いを大きく意識せずすべての「みえる」を「みえる１」として「みる」と「みえる」の検討を進める。

まず、「みる」と「みえる」を比較しようとするとき、「みる」は［(N が／は) X をみる］であり、「みえる」は［(N に／は）X がみえる］という形でしか用いることができないので、例文（9）や（10）の look と see のように同じ文構造に当てはめて検討することはできない。

日本語の「みえる」の場合、［N は／に X がみえたい／みえたがっている」は非文であるが、英文（11）と（13）に倣った下記（15）～（18）は、いずれも自然な日常言語で使用される文である。

（15）鮮やかな山の紅葉がみえるよう私は窓際の席に着いた。
（16）自分の書斎からもみえるよう彼はその絵を廊下の端に飾った。
（17）暗がりでも自分の足元がみえるよう自ら案内灯を設置した。
（18）小さい文字でもみえるよう彼女は老眼鏡を買った。

これらの文中の「みえる」はいずれも主体が自分の意志で行えるという前提があり、それを実現するために、窓際の席に着いたり、絵を廊下の端に飾ったりしたのである。もし、「みえる」の意味に主体の意志（動作主性）が皆無で偶然やたまたま「みえる」だけなのであれば、このような文は成り立たないはずである。

英語の see と同様に「みえる」にも＜主体の意志＞は含意されており、視覚動詞「みる」と「みえる」の中核的意味である＜視覚で知覚する＞行為は人の意志や思考がなければ行えない Arnheim（1969）。だとすれば、母語話者が何気なく使っている以下のような文でも、話者の意志は確かに存在し、言語化されたときに意志の部分が希薄化または顕在化されているのだと思われる。

(19) 山のてっぺんから僕らの学校がみえた。
(20) 山のてっぺんから僕らの学校をみた。
(21) 明かりが点いているのがみえて安心した。
(22) 明かりが点いているのをみて安心した。

(19)(21) の文中の「みえる」は、主体の意志なしに発生した行為ではない。人は選択的にモノを＜視覚で知覚する＞という基本があり、視野に入るすべてのモノを知覚するのではなく、自分にとって関心または関係のある事象を視覚で捉えるという機能を備えているからである（Arnheim 1969, Givón 2001, Changizi 2009)。「みえる」と「みる」の違いは、主体がどのようにその事象を表しているかの違いであり、意思の有無ではない。(19)(21) では、自らの意志の存在を希薄化させ受け手のように表しているのに対し、(20)(22) では、自分の意志によって選択的に事象を捉えたということをより顕在化させた表現であるといえよう。「みえる」は対象物から主体へ視覚的刺激が向かい、「みる」は主体から対象へ視覚的作用が向かうという概念的な方向性の違いであり、基本は図３で示すように焦点のシフトであるとされている。

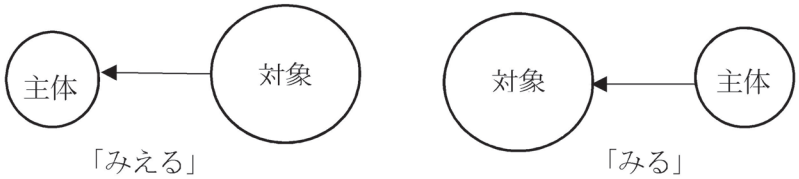


図３「みえる」と「みる」の概念的方向性

ただし、ここでも注意を要するのは、この方向性はあくまでも傾向や度合いであるということである。例えば、(19) の「山のてっぺんから僕らの学校がみえた。」と発した場合、もし見ようと探していて「みえた」のであれば、発話者はもはや受け手ではなく明確な意志を持って「みえる」という行為に及んだのであろうし、聞き手もその状況を知っていたならそのように解釈するであろう。つまり、「みえる」によって喚起される「みる」からの方向性のシフトは、図３左図のような単純なものではなく、図4に示す両方向への心的および物理的な視覚作用の活性化があると考えられる。

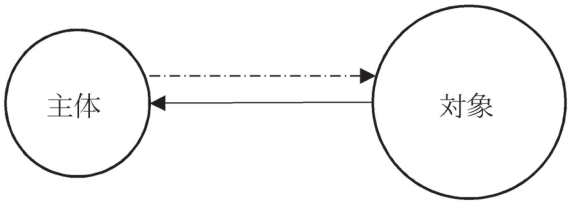


図４「みえる」の方向性の概念図

図４は、「みえる」という言葉で主体と対象との間で交わされる概念と刺激の方向を抽象化したものあるが、対象から主体に伸びる実線の矢印が示しているのは、例えば対象が「学校」ならば建物の様子や主体からの距離そ

の他外観的な情報であるとともに、より漠然と醸し出される雰囲気や思い出などでもあり得る。また、反対に主体から対象に伸びる破線の矢印[9] が表しているのは、対象に視線を向けようという主体の意図や意志はもちろんのこと、同時に、喜びや安心であったり関心または評価であったりもするだろう。

同じ「みえる」という言葉であっても、どの概念がいずれの方向にどの程度、顕在化したり希薄化したりするのかは話者同士の関係や共有知識およびそのときの状況、人の内面の状態など様々な要因で決まると推察される。

このように考えると、look／see と同様に動作主性によって「みる」／「みえる」を区別することが必ずしも適格ではないことが分かる。であるなら、これら４つの日英の視覚動詞の意味範疇をどのように判別できるか、その試みの１つとして視覚の認知プロセスという生態学的知見を基に以下で検討する。

3.3 認知プロセス視覚経路上の look／see、「みる」／「みえる」

すでに提示したように、生態学的に視覚から入った情報が段階的に脳内で処理されるという事実は脳科学者である藤田（2007）や横澤（1992）でも指摘されており、高山（2004）はその過程を「かっこいい」とはどういうことなのかについての論文の中で、視覚情報が（検出→視覚野での処理→大脳新皮質での処理）という3段階で脳内を巡るとし、これらが、「…並列的なやり方で活動的になり、神経インパルスが脳内の各部に広く分散して送られ、同時的に処理される（高山2004:24）」と述べている。[10]

このように視覚から入った情報が段階的に脳内で処理されているのなら、実質的な時間経過は一瞬にも満たないとしても認知には順序があると想定でき、look／see、「みる」／「みえる」の意味分析の１つの枠組みとしてこの知見を踏まえ、それぞれの視覚動詞がその脳内プロセスのどの部分を表す傾向があるのかの検討を試みるが、すべての経路をここで論じることができないため、以下の考察では複数ある経路の一部のみを対象とする。

3.3.1 ＜注意の喚起＞から＜理解＞＜情報の共有・確認＞まで

Gruber（1967）は、look と see を後続する前置詞によって区別している（2.2.1参照）が、何故そうなるのかについての説明はしていない。以下ではこの後続の前置詞が異なることに着目し look と see が表す概念の違いを認知言語学的に検討する。

まず、英語の look には前置詞を伴わない以下のような用法がある。以下では便宜上、この前置詞が後続しない look を look1とし Gruber（1967）で言及されている後続する前置詞を伴う look を look2と区別して検討することとする。前置詞を必要としない look1の用法の１つを以下に示す。

(23) Look, there he is.

(24) Look what you have done.　　((23) (24) ともに Weblio から)

(23) (24) は、一見、何かに目を向けるよう指示しているように思われるが、日本語の場合、(23) を「見て、あそこに彼がいる。」と訳すよりも、むしろ「ほら／ねえ／ちょっと、あそこに彼がいる。」のほうが自然で日常会話でもよく使われるのではないだろうか。また、“Look, I just cannot agree with you.” などの場合は、もはや視覚をまったく必要とせず、注意のみを促す用法である。(24) もまた、直訳の「自分のしたことを見なさい（ご覧なさい)。」よりも「これは貴方のせいよ（おかげよ)。」というようなニュアンスの表現であり、「これ」という指示代名詞を用いることで、相手の注意を特定のモノに向けさせるという目的が果たされる。従って、発話行為的な機能を中心に語用論的に (23) (24) を日本語に置き換えると「みる」という動詞は訳文で必ずしも必要ではない。だとするならば、look1は視線の移動よりも何かに＜気付く＞ことを促す動詞であると考えられる。しかし、文頭以外の look1の用法、例えば” Why don't you look where you're going?” などでは視線の移動がその意味に含まれるため、文脈による look1のより詳細な検討が必要と思われる。

英語の look／see および日本語の「みる」／「みえる」も、心的（あるいは認知的）活動を伴うというのが本稿の前提であるが、(23) (24) の look1は特に＜注意の喚起＞が顕在化している動詞である。日本語の場合、「…（を）見て。」と発するとき、特定のモノに実際に視線を向けるよう指示していることが感じられるが、それに比べて、look1では視覚に訴える部分は弱く、＜注意＞や＜気付き＞の促しのほうが強いと思われる。このため、日本語では単に「ほら／ねえ／ちょっと」というような表現が使われる状況で英語では “Look、. . . ” を使うことができるのである。

つまり、「視覚情報によって検出される」という視覚的情報の処理経路の第1段階である「検出」(高山 2004: 24) に当たる＜注意＞＜気付き＞の顕在化が look1の特徴の１つであるといえる。これに対し、英語の see には、“I see. ”（分かります。／分かりました。）という表現があることからも、＜理解する＞の意味にまで用いることができ、視覚処理経路上のより深い部分に至る動詞であると考えられる。

(23) (24) の look1を see に置き換えると次のようになる。

(25) See, there he is.

(26) See what you have done.

（25）では相手の注意を促すという目的は弱く、むしろ、話し手と聞き手の間にすでに何らかの会話があり、その既存の共有知識の確認のほうが顕在化した表現であり、「ほら／ねっ、私の言ったとおり、彼はそこに居るでしょ？」のような意味合いがあり、この文の主な発話行為は、共有知識を確認することといえる。また、目的語が明示されている（26）でも視覚動詞 see によって表されているのは、すでに相手の注意が向かっていること（（26）の場合は相手がしたこと）についての情報の確認や理解を促す目的のほうが強く、日本語に意訳するならば、「なんてことをしてくれたの。／自分のしたことが分かってるよね。」というようなニュアンスとなろう。これらのことからも、see が「情報が処理される」視覚経路の第３段階（高山 2004: 24）よりも更にその先の＜知識の共有＞＜相手との確認＞といった領域にまで及ぶことがうかがえる。また、see も look1同様に文頭以外の用法“Please see if these shoes fit you.”や“Go and see who it is.”など共有知識の確認以外の意味が顕在化する場合があり、これらについては今後の更なる考察が必要である。

また、日本語の「みる」にも母語話者の間で一般的に思われている以上に＜分かる＞という意味が含まれていることを示す例として、以下の実際に使われた英文を訳してみることにする。

（27）You can learn a lot by **looking** around. **See** what others are growing or building in your area now, and also what worked in the past.
（周りを**見て**多くを学ぶことができる。君の地域で他の人たちが何を育てまたは築いているか、そして過去には何が上手く行ったかを**見る**んだ。）　（COCA から）[11]

原文の see によって話し手が聞き手に示しているのは、単にその地域がどのように開発されているかを＜視覚で知覚する＞だけでなく聞き手自身がそれを＜理解＞そして＜評価＞し、参考にし、最初の文にあるように＜学ぶ＞ことでもある。興味深いのは、英語の look と see ともに「みる」と訳せること、また、see の意味の１つとされる＜分かる＞＜理解する＞が日本語の「みる」からも母語話者に伝わることである。「分かります」、「分かりました」を意味する英語の“I see.”が日本語で「みえます」、「みえました」に訳せないことから表面上は日本語の視覚動詞「みる」や「みえる」にはないと思われている＜分かる＞＜理解する＞という意味が実際には含まれていることがここでも推察できる。

3.3.2 ＜視覚情報の検出＞から＜情報の認識＞まで

Gruber（1967）は後続する前置詞の違いに基づき look2と see では視線が向かう方向性が異なると議論している。しかし、look2に後続する前置詞によって look2自体の概念が変化すると

いうことには言及していない。認知言語学では、１つの言葉が別の言葉と繋がると、その言葉自体の意味もまた変化すると考える。[12] 従って、look2の場合もまた、[look toward N] と [look at N] では look によって表される意味範疇に違いが生じる。

(28) But when I **looked at my mother**, it seemed that she was the tired one.
(29) I could only **look toward** my mother, filled with fear and loathing, and imagine plunging my fork her neck.
(30) When he stood up, he'd **look toward** us, but he couldn't see without his glasses.
((28) ～ (30) は COCA から)[13]

(28) の at が後続する look2では、ただ視線を母親に向けただけでなく、その後に続く文から推察されるように母親の内面にも注意が向かっているということが読み取れる。それに対し、toward が後続する (29) は視線を向けることはできても、それによって生じる感情を恐れそれ以上視覚から入る情報を処理することを拒む様子が表されており、また、(30) では、"but he couldn't see" と続いていることから、情報のより深い認識を意味する see に至ることなく単に視線を向けただけである。

以上のように、look2自体の意味が後続の前置詞に影響されるため、Gruber (1967) のように動詞と後続する前置詞を独立させて look と see の違いを論じることは適切ではないと思われる。英語の視覚動詞 look は後続する前置詞の有無、また、後続する前置詞の種類によっても、認知プロセスのどの段階にその意味が及ぶかが影響されると考えられる。

日本語の「みる」／「みえる」もまた、久保田 (2015) で論じたように文脈によって様々な概念が顕在化または希薄化される。認知プロセスという１つの流れの中で検討すると、一般的には直感として「みる」が「みえる」に先行する。

(31) その部屋をみた。そして、椅子の上の猫がみえたがグッスリ寝ていた。
(32) その部屋がみえた。そして、椅子の上の猫をみたがグッスリ寝ていた。

(31) の場合は部屋の中を「みた」後に、同じ部屋の中で猫が「みえた」という時間的順序と空間の同一性また行為の連動性が読み取れるが、(32) の場合は同じ部屋の中にその猫が居たという解釈には必ずしもならず、因果関係がより見出し難いと感じられ、「みえた」と「みた」は連動しない。しかし、以下の文では、その連動性もまた絶対的なものではなく文脈によって変わり、傾向に過ぎないことが感じられる。

(33) その部屋をみた。そして、探していた猫がみえたのだが、すぐに隠れてしまった。
(34) その部屋がみえた。そして、探していた猫をみたのだが、すぐに隠れてしまった。
(35) その部屋の方をみた。そして、一瞬、猫の姿がみえたがすぐに隠れてしまった。
(36) その部屋の方がみえた。そして、一瞬、猫の姿をみたがすぐに隠れてしまった。

つまり、前述の look1と look2の違いおよび look2自体も後続する前置詞によって意味が異なるのと同様に、文脈によって「みる」も「みえる」も多様に変化すると思われ、先の (32) (33) の例文で表された認知プロセス上の順序も「みる」と「みえる」の特徴のほんの一端に過ぎないと考えられる。

4．結論と今後の課題

本稿では単語は概念の集合体であり、１つの単語に付与された複数の概念のそれぞれが文脈によって同時に様々な度合いで顕在化・希薄化されることを示した。通常、look =「みる」、see=「みえる」と説明されることが多いが、これらの日英視覚動詞が１対１の対訳では把握し切れないこと、またそれぞれ独自の意味範疇を持っていること、更には、１つと思われている単語であっても中核的概念、つまり、本稿の場合は＜視覚で知覚する＞というある程度固定された概念を中心に様々な意味に変化し、例えば前置詞を伴わない look1などでは、その中核的概念でさえもが希薄化される傾向があることが分かった。

また、当該の日英視覚動詞を動作主すなわち主体の意志や意図の有無で区別することには限界があり、動作主性の強弱の程度で動詞を分析する必要があることも提示した。そして、生態学的な知見に基づき視覚動詞が＜注意の移行＞から＜情報の認識＞までと仮定した視覚的認知プロセスのどの部分をそれぞれの動詞が表しているかを検討した。その結果、単語で表わされる発話行為を含む「意味」はそのような経路に沿ってある程度は解釈できる反面、言葉の「意味」の有機性や可変性はそのような経路が非常に複雑なものであることを表している可能性も示唆した。

今後の課題としては、look および see の用法をより幅広く検討すること、また、3.2.2 でも言及した２種類の「みえる」の違いを踏まえた「みる」／「みえる」の動作主性および焦点シフトの度合いについてのより詳細な検討、see／can see との比較、および、視覚動詞によって表される言語学的な視点からの認知プロセスの探究を更に深めることが重要と考える。更に、Gruber（1967）の see と look の分析を認知言語学的に再検討し、これらの動詞に含意される概念を、前置詞も含めてより深く考察しその特徴を明らかにすることを目指す。

注

1）“…a lexical meaning is neither totally free nor totally fixed. It is not totally free because the expression evokes a certain range of knowledge and specifies a particular way of accessing it.”（Langacker 2013: 39）

2）各種オンライン辞書参照。Weblio http://ejje.weblio.jp/content/look
Dictionary.com http://dictionary.reference.com/browse/see?s=t　その他参照。

3）下線と訳は筆者による。

4）下線と例文（4）、（5a）、（5b）の括弧内の訂正文および（6a）、（6b）の訳は筆者による。

5）田中（1996）は、「見る」の意味を基本義から第6義まで＜視覚＞＜理解・判断＞＜処置＞の基準で分類し、メタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）に基づいた多義構造的意味ネットワークとして図式化している。（田中 1996: 136参照）

6）藤田（2007）は、また大脳皮質視覚野は大脳皮質全体の３分の１を占め、人が「見る」ことを簡単に感じるのは、これだけの脳組織をその仕事に割り当てていることがその理由の１つであろうと述べている。（藤田 2007: 94）

7）COCA（The Corpus of Contemporary American English）http://corpus.byu.edu/coca/

8）辻（編）2013: 249から転用。詳しくはLangacker 1999: 160-161 参照。

9）図４の実線と破線の使い分けは、「みえる」は対象から主体に向かう概念のほうがより顕在化している可能性を示すが、これについては別途、更なる検討を要する。

10）下線は筆者による。ここでも脳の各部に情報が広く分散されると述べられており、脳内の視覚経路が複数あることが示唆されている。（cf. 藤田（2007））

11）訳と太字は筆者による。

12）詳しくはEvans（2006, 2010）の LCCM（Theory of Lexical Concepts and Cognitive Models）参照。

13）下線と太字は筆者による。

参考文献

久保田美佳「視覚動詞の修辞性に関する認知意味論的分析―『みる』とseeを中心に」『比較文化研究』No.117、2015年、15-21頁。

高山誉史『製品形態に関する人間の認知的考察―「かっこいい」形態についてA Study on Cognition for Production―An Impression of “Kakko-ii』平成10年度修士論文　筑波大学大学院、1998年。

田中聡子「動詞『みる』の多義構造」『言語研究』110号、1996年、120-142頁。

辻幸夫（編）『新編　認知言語学キーワード辞典』研究社、2013年。

服部四郎『英語基礎語彙の研究』三省堂、1968年。

深田智「“Subjectification”とは何か：言語表現の根源を探る」『言語科学論集』7号、2001年、61-89頁。（京都大学大学情報リポジトリ）

藤田一郎『「見る」とはどういうことか：脳と心の関係をさぐる』DOJIN選書、2007年。

山梨正明『認知言語学原理』くろしお出版、2000年。

山梨正明『認知構文論：文法のゲシュタルト性』大修館書店、2009年。

山梨正明『認知意味論研究』研究社、2012年。

油井紀久子「日本語動詞の意味の抽象化過程：イク・クル・ミルの意味分析を中心に」『大阪大学文学部紀要』36号、1996年、1-29頁。

横澤一彦「視覚情報処理の基礎課程 Basic Processes in Visual Perception」『生産研究』44巻12号、1992年、44-48頁。

Arnheim, Rudolf (1969), *Visual Thinking*, University of California Press, Berkeley/Los Angeles/London.

Changizi, Mark (2009), *The Vision Revolution: How the Latest Research Overturns Everything We Thought We Knew About Human Vision*, BenBella Books, Inc., Dallas, Texas.

Chomsky, Noam (1957), *Syntactic Structures*, Mouton de Gruyter, Berlin/New York.

Chomsky, Noam (1965), *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge, MIT Press, Mass.

Evans, Vyvyan (2006), “Lexical concepts, cognitive models and meaning-construction,” *Cognitive Linguistics* 17-4, 491-534.

Evans, Vyvyan (2010), “Figurative Language Understanding in LCCM Theory,” *Cognitive Linguistics* 21-4, 601-662.

Givón, Talmy (2001), *Syntax: An Introduction*, Volume 1, John Benjamins Publishing Co., Amsterdam.

Gruber, Jeffery S. (1967), “Look and see,” *Language* 43 (3), 937-947

Langacker, Ronald W. (1987), *Foundations of Cognitive Grammar Volume I: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Stanford, California.

Langacker, Ronald W. (1999), *Grammar and Conceptualization*, Mouten de Gruyter, Berlin.

Langacker, Ronald W. (2013), *Essentials of Cognitive Grammar*, Oxford University Press, Oxford.

Sweetser, Eve (1990), *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*, Cambridge University Press, Cambridge.（澤田　治美（訳）（2000）『認知意味論の展開』東京：研究社出版）

（くぼた・みか　本学博士課程後期在籍）